

平成 22 年 4 月 27 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520448

研究課題名（和文）第二言語としての日本語ライティング評価：Good writing のさらなる追求

研究課題名（英文）Writing assessment of Japanese as a Second Language: Pursuit of good writing

研究代表者

田中 真理 (TANAKA MARI)

名古屋外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：20217079

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は第二言語としての日本語小論文における good writing とはどのようなものかを明らかにすることである。まず、ライティング評価の一致がなぜ難しいのか、パフォーマンステストとしての真正性は高くとも人間が介在するアセスメントという点から、その原因について検討した（田中・長阪，2009）。次に、good writing がどのようなものとして日本語教師に認識されているか、プロトコル調査を行った。具体的には、good writing の候補である2種類各6編の小論文を、日本語教師10名に総合的評価で順位付けをしてもらい、評価の際のプロトコルをとった。そのプロトコルと事後のアンケート調査の分析より、全体的なアカデミックらしさ（「表現力」や客観的で詳細な「サポート」）が、「課題の達成」や「主張」や「全体構成」よりも前面に出て評価される可能性のあることが示唆された。これは英語ライティングの評価とは大きく異なる点である。英語ライティングに全てを倣う必要はないが、日本語小論文において何が最も重要なのかについては、ある程度共通認識が必要であり、本研究によってライティング教育にも関わる重要な課題の1つが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this particular study is to answer the question: What is good writing in Japanese as a second language? The ultimate purpose of this research is to explore the elements that make good writing in Japanese from a broad perspective, but the aim of this particular study is to clarify how good writing in Japanese as a second language is perceived by Japanese teachers. In this study, we first investigated the source of disagreements on writing assessment from the perspective of rater variation (Tanaka and Nagasaka, 2009). Next, we conducted research on ranking. For this research, two types of essays (six expository and six argumentative) were ranked separately by 10 experienced Japanese teachers using holistic schemes. Written as timed impromptu writing tests by mostly Asian students at Japanese universities, these essays had been assessed in advance by researchers and ranked as the top six. In order to clarify the decisive factors in ranking these essays, raters' think-aloud protocols were recorded and analyzed along with the questionnaire.

The results indicated: 1) Japanese writing does not have a clear "Essay Style" as English

essays do; therefore, raters lack strong criteria for assessing essays. 2) Some Japanese essays, even though they did not fulfill the task completely, or lacked consistency of main idea or awareness of organization, were ranked high because “academism” (academic atmosphere) was perceived in the supporting ideas or throughout the essay. In Japanese, the use of certain “*Kanji*” (Chinese characters) words contributes to “academism.” In English essays, task fulfillment, main idea, and good organization are considered as preconditions for assessment regardless of “academism.” The present study confirmed the necessity for the establishment of common understanding, including scoring rubrics and scoring procedures, for writing assessment among Japanese language educators.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：第二言語としての日本語、第二言語によるライティング、ライティング評価、評価者、総合的評価、マルチプルトレイト評価、評価基準、プロトコル

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成16年～18年度科学研究（以下、18年度科研）「第二言語によるライティングについての基礎的研究：Good writingとは何か」に続く研究である。18年度科研では日本語教育において共有できるライティング評価基準作成を目指し、評価のガイドラインを完成させた。実際にそれを使用し、日本語教師に小論文を評価してもらったところ、(1) 「目的・内容」「構成・結束性」の評価が割れやすいこと、と同時に両者の評価に相互関係がある可能性、(2) 評価者に独自のライティング観のある可能性が示唆された。本研究（平成19年～21年度科学研究）においては、上記の点を、(1) 小論文（一致して評価の高かった小論文と評価の割れたもの）の分析、

(2) 評価者（ライティングの専門家を含む、ライティング教育・評価経験者）のライティング評価時のプロトコルの分析とアンケート調査の分析を通して検討する。特に、プロトコル分析から評価者が何に注目して評価を行っているかを明らかにすることによって、評価者のライティング観、good writingとなるための要素（決め手）が分かるとともに、評価の割れる原因も究明できるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1) アカデミック・ライティングにおける第二言語としての日本語小論文のgood writingとはどのようなものとし

て認識されているかを明らかにし、(2) 評価者個人のライティング観を越えた good writingの要素を検討するとともに、(3) 評価の割れる原因を究明し、第二言語としての日本語ライティング評価に貢献することである。

3. 研究の方法

平成18年度科研における評価の一致・不一致について検討する過程で、なぜ評価が一致しないのかを明らかにするためには、アンケートによるメタ認知的な調査のみでなく、評価者の評価の思考プロセスを調べる必要があると考えた。そこで、本科研ではプロトコル調査を行うことにした。

プロトコル調査は、予備調査を経て、本調査(調査1, 調査2, 調査3)を行った。

調査1, 調査2では、「合併データ」(後述)の上位の小論文から6編を使用して、10名の日本語教師にアカデミック・ライティングとしてのgood writingという観点から、各自の基準で総合的評価をしてもらった。調査1は点数付け(6点~1点)、調査2は順位付け(1位~6位)である。また、発話思考法(think-aloud)を用い、評価の際、思ったこと、考えたことをできる限り口に出してもらい、それを録音した。調査3は、平成18年度科研で開発したマルチプルトレイト評価表を使用して、2種類各10編の小論文を評価してもらった。また、それぞれの調査終了後にメールの添付でアンケート調査を行った。以下に詳細を記す。

(1) プロトコル調査準備 (H20年4月~7月)

① 本研究で使用した小論文

本研究の小論文は基本的に1時間前後の限られた時間で書かれたものである。したがって、good writingと言っても限界がある。初稿であり、時間をかけて推敲すれば、さらによくなる可能性は十分にあるが、ここでは、それぞれ完全ではないであろう小論文が、何(どのような要素)を優先して、よりgood writingだと判断されるのかを考察、分析する。

② プロンプト

本研究で使用したプロンプトは、「ファーストフードとスローフード」(以下, food)と「通学授業と遠隔授業」(以下, e-learning)の2種類である。foodはアカデミック・ライティングの典型的なディスコース・モードである「説明」(exposition)を、e-learningは「論証」(argumentation)を主要モードとし、600字程度で書くように指示している。

③ プロトコル調査使用小論文の決定

まず、本科研研究者3名による追加小論文評価を行った。さらに、18年度科研における研究者4名の既存小論文の評価データを加え、両方の研究に参加した1名の研究者の評価点を基準に「合併データ」(food: 127編, e-learning: 117編)を作成した。プロンプト別に、マルチプルトレイト評価の5つのトレイトの総計で小論文の順位を出し、上位のものを中心にプロトコル調査使用小論文を決定した。

「合併データ」の小論文の書き手は、日本の大学に所属する大学生・大学院生である。国籍は中国、韓国、インドネシア、マレーシア、タイ他計22で、日本語レベルは初級後期から上級までの広範囲に及ぶ。

プロトコル調査で使用した6小論文2種類(good writingの候補)の書き手の国籍は、F01:パキスタン, F02:中国, F03:中国, F04:インドネシア, F05:中国, F06:中国, E01:マレーシア, E02:パキスタン, E03:モンゴル, E04:韓国, E05:中国, E06:スリランカである。

④ 評価基準の見直し

18年度科研で作成した評価基準A, 評価基準Bの基準説明を検討し、若干修正した。

(2) プロトコル予備調査 (H20年8月)

調査協力者(評価者): ライティング教育・

評価経験のある日本語教師2名

調査内容: 2種類の小論文評価

調査手順及び調査後の作業:

①調査1「総合的評価」(点数)6編×2

調査2「総合的評価」(順位)6編×2

評価時のプロトコルを録音(録画は途中で中止)

②「総合的評価」に関するアンケート調査(メール)

③調査3「マルチプルトレイト評価」10編×2

④調査4「マルチプルトレイト評価」1編×2
評価時のプロトコルを録音

「マルチプルトレイト評価」に関するインタビュー

⑤最終アンケート調査(メール)

⑥プロトコル・データの書き起こし

⑦予備調査の検討, 本調査の準備

(3) プロトコル本調査 (H20年12月~H21年3月)

調査協力者(評価者): ライティングの専門家を含む, ライティング教育・評価経験のある日本語教師10名

(評価者10名は、大学でのライティング教育, その評価の経験者であり、全員女性である。年齢は20代から50代で、30~40代が中心であ

る。日本語教育経験年数は4.8年～24年で、平均16.6年（標準偏差（SD）：6.5）、ライティング教育（評価）経験年数は2.8年～15.8年で、平均10.3年（SD：4.3）である。

調査内容：2種類の小論文評価
調査手順及び調査後の作業：

本調査では、予備調査の手順①～⑥のうち、④の調査4及びインタビューを中止し、インタビューでの質問を最終アンケート調査に組み込んだ。

当日のプロトコル調査（調査1と調査2）のために準備したものは、以下のAであり、自宅での調査3のために用意したものは、以下のBである。

A 本調査当日に使用するもの

- ①プロトコル練習用紙：写真コンテスト（課題文、写真）
- ②小論文 6編×2
- ③小論文の課題文（プロンプト）2種類
- ④調査1、調査2用指示文及び評価記入用紙
- ⑤承諾書、出勤表、振込依頼用紙
- ⑥ICレコーダー

B 本調査当日に渡し後日開封してもらおうもの

- ①マルチプルトレイト評価用小論文
10編×2
(上記Aの②+4編×2)
- ②マルチプルトレイト評価基準A、評価基準B
- ③指示文及び評価記入用紙（評価記入用紙は、メールでも送付）
- ④国研短期研修時使用のハンドアウト
- ⑤返信用封筒（調査終了後、使用済みの資料・小論文一式を返送してもらう）

(4)プロトコル・データ作成（H21年1月～3月）

- ①プロトコル・データの書き起こしの際の文字化のルールを作成した。
- ②プロトコル・データの書き起こしを行った。
- ③プロトコル・データの書き起こしは、その後分析用にexcel fileにデータ化した。

(5)ライティング評価一致・不一致の検討

平成18年度科研のデータに本科研研究からの示唆を組み入れ、ライティング評価の傾向（一致・不一致）、評価の割れる原因について分析し、論文2本にまとめた。

(6)プロトコル・データの分析とGood writing

についての検討

上記プロトコル調査とアンケート調査を分析し、①「総合的評価」における上位3小論文の順位決定要素、②「総合的評価」と「マルチプルトレイト評価」の関係、③評価者のライティング評価時の思考プロセス、④日本語小論文のgood writingの要素等について検討した。

プロトコル調査の分析を中心に、今後いくつかの論文にまとめる予定である。

4. 研究成果

プロトコル調査とアンケート調査の分析より、「課題の達成」「主張の明確さ」「構成」「談話展開のテクニック」「客観的で広い視野からのサポート」「オリジナリティ」「表現力の豊かさ」等が日本語小論文のgood writingの順位決定要素となっていることが分かった。しかし、どの要素を優先させて評価するかについては共通の認識が認められなかった。各要素のバランスがよい小論文では評価が一致したが、「主張」「課題の達成」「全体構成」が不十分でも、「サポート」が卓越していたり、アカデミック・ライティングにふさわしい「表現力」が認められたりすると、高く評価される可能性のあることが示唆された。

今回の調査での反省点は、これらの小論文評価依頼時に、テスト設定とも教室での評価とも示さず、アカデミック・ライティングとしてのgood writingとしか示さなかったことである。テスト設定であるならば、多少荒くとも、課題の達成が重視されると思われる。しかし、プロトコルを見ると、時間をかけて書くときに要求されるような要素についての指摘もあり、評価の目的が曖昧であったと反省される。

しかしながら、読み手にとって光っている部分—それが「サポート」に相当する部分であっても—や全体的なアカデミックらしさ（表現力や客観的で詳細な説明）が、「課題の達成」や「主張」や「全体構成」よりも前面に出て評価される可能性のあることが明らかになった。これは英語ライティングとは大きく異なる点である。言語構造の異なる、それ故おそらく思考方式も異なるであろう英語ライティングに全てを倣う必要はないが、日本語小論文を書くときに何が最も重要なのかについては、ある程度共通認識が必要ではないだろうか。ライティング教育とライティング評価は直結する。今後の日本語のアカデミック・ライティング教育にも関わる大きな課題の1つが明らかになったと言えよう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

- ① 田中真理・長阪朱美 (2009) 「ライティング評価の一致はなぜ難しいか—人間の介在するアセスメント」, 『社会言語科学』 12巻1号 108-121. 社会言語科学会. (査読有)
- ② 田中真理・長阪朱美・菅井英明・成田高宏 (2009) 「第二言語としてのライティング評価ワークショップ—評価基準の検討—」, 『日本語教育論集 世界の日本語教育』 19, 157-176. 国際交流基金. (<http://www.jpfi.go.jp/j/japanese/survey/globe/19/index.html>) (査読有)

[学会発表] (計3件)

- ① 田中真理 (2008, 3月15日) 「日本語教育の立場から 学習者と教師の Collaborative Writing Assessment: 学習者による違い」, 第2言語ライティングセミナー「第2言語ライティング能力を考える～何をどのように評価し, フィードバックを与えるか～」, 東京国際大学早稲田サテライト, 東京
- ② 田中真理 (2008, 3月15日) 「どうすれば第2言語ライティング能力を伸ばせるのか?」, パネルディスカッション (パネル→, Paul Kei Matsuda, 佐々木みゆき, 二通信子, 田中真理, 木村恭子, 東京国際大学早稲田サテライト, 東京
- ③ Tanaka, M. (2007, Sep. 15). *Collaborative Writing Assessment: Teacher and Student Self-Assessment*, Paper read at the 6th Symposium on Second Language Writing, Nagoya Gakuin University, Nagoya, Japan.

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

本科研報告書 (冊子体)
田中真理 (代表) 平成19年度~21年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)) 研究成果報告書「第二言語としての日本語ライティング評価: Good writing のさらなる追求」(全140ページ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 真理 (TANAKA MARI)
名古屋外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号: 20217079

(2) 研究分担者

鎌田 美千子 (KAMADA MICHIKO)
2007年度
宇都宮大学・留学生センター・准教授
研究者番号: 40372346

(3) 連携研究者

坪根 由香里 (TSUBONE YUKARI)
2008年度, 2009年度
早稲田大学・日本語教育研究センター・講師
研究者番号: 80327733

鎌田 美千子 (KAMADA MICHIKO)
2008年度
宇都宮大学・留学生センター・准教授
研究者番号: 40372346

(4) 研究協力者

坪根 由香里 (TSUBONE YUKARI)
2007年度
早稲田大学・日本語教育研究センター・講師
研究者番号: 80327733

長阪 朱美 (NAGASAKA AKEMI)
2008年度, 2009年度
恵泉女学園大学・人文学部・教授
研究者番号: 50207990